

宗學の課題

藤原了然

(一)

昨今に於ける宗學界の動搖は蓋し深刻なるものがある。もちろんこれは、ひとり宗學界のみに限つたわけではない、宗門全般、佛教全體を通じての共通な現象ではあるが、宗門の第一原理となるべきものが宗義であり、この宗義を扱ふものが宗學の本務である以上、今日の如き外的情勢の劃期的變動に即應するための指導原理確立に向つて宗學界が安閑として舊態を墨守するが如きは許さるべきでない。事實、現在の宗學界は苦吟のさなかにある。

然し、端的にいふならば、現在の宗學界の苦悶は陣痛のそれに喩へらるゝよりは、むしろ日暮れなるとして道を失つた旅人のそれにも比さるべき色彩が著しい。陣痛の惱は、ひかりに向つて避くべからざる過程であり、いはゞそれは喜ばしき苦吟なのであるが、迷路の惱みは果敢なき徒勞でしかない。諸般面目一新の日、すべての部門が生れ出づる惱を味はなければならぬ

ことは理の當然ではあるが、その惱は飽くまで明日の光明を約束されたところのものでなければならぬ。途方にくれたそれであつてはならぬし目的を見失つた茫然さであつてはならぬ。

吾々が現在の宗學界に向つて、聲を大にして要請したいのは正しくこの點に關してである。しかし現在の宗學界が苦吟してゐるといふことは、逆説的にいふならば宗門が生きてゐる證據であり、宗學が生命を失つてゐない、反證と考へることが出来る。死せるものに惱はないからである。従つて宗學界が苦吟してゐるといふことは喜ばしき現象といふことさへ許されるであらう。然しながら、更に一步をすゝめて現在の宗學界の苦吟の内容に想ひ到るならば吾々は暗瞶たらざるを得ないものがある。何故ならばその苦悶は恰も羅針盤を失つた豪華船に酷似するものがあるからである。現在の宗門はその形態に於て又その内容に於て寔に堂々と大洋を航行するに足る豪華船を髣髴たらしむるものがある。然しながらそれは、悲しいかな人間の眼目にも喩へらるべき羅針盤(指導原理)に故障を生じてゐる。健脚を擁しながら進むべき方角に明かでなく、豪力を懐きながら運ぶものに昏い。歴史あるし、せを誇りながら、上は國體と宗義の關係に際かでなく下は念佛生活の具體的内容を明示することの困難が拒まれない。もとより、今日爾かる所以については、それだけの理由がないわけではない、けれどもかくの如き問題は、もし宗義の本質に鑑みるならば、その要請に應じて速かに明示さるべき性質のものである。もしそれが出来ないならば、

宗學が宗義の本質を取扱ふことを忽せにしてゐた結果といはねばならぬ。

吾々は、今こゝに於て所謂傳統的宗學の弊を指摘することを主題とするものではないし、又宗義の本質究明に關しては別な機會を希ふものではあるが、かくの如き切實なる現實的要求に應へて最近出版された二・三の書物を參考として、現在の宗學の課題を取り上げて見たいと思ふ。

佛教各宗に於ける宗學的著作は最近のもののみでも決して少くはない。然しながら、これら全體に關する檢討は微力のよくする所ではないし又考へやうによつては無意味なことでもある。何故ならば各宗々學の通性に鑑みるならば、一斑を以て一斑は窺ふといふことは極めて容易であり、且見方によつてはこの方が妥當であるとさへ考へられるからである。それで、今は限られた範圍すなはち淨土宗學に關する部分のみを問題としたと思ふ。

(11)

こゝに一年間の著作中、その發刊次第によるならば、最初に挙げらるべきものに石井教道氏の「法然上人の日本的佛教」(京都伏見松林宗學研究會刊、昭和十五年十一月、定價貳圓五拾錢)がある。著者は夙に淨土宗義史なるものを創唱せし淨土宗學界の先覺たるとともに篤學無比、淨土宗乘學者中の出色と評してよい。かねて淨土宗義の本質論に傾倒し凡入報土、本願鑽仰を

高調さるゝ著者にしてこの著あるは敢へて奇とするに足らないのであるが、その題名に接するとき吾々は深刻なる時代相を痛感するとともに著者の心勞を買はずにはゐられない。内容の詳説は茲では許されないとこであるが、「法然上人の日本的宗教」といふ題名そのものが、可なり明白にその内容を標示してゐるものと考へることが出来る。四六版四百頁、博覽廣識、資料豊富、その立論概ね正鵠と稱してよく、その狙ふところは、聖法然をして眞の日本人の先覺者としての位に立たしめんとするにある。従つて一部を通じての開顯的部分も亦た尠からぬものがあるのであるが、忌憚なく所感を述べるならば、集大成の著作ではあるが資料の取りさばきに専らにして、従つてやゝ生彩に乏しい。題名の如く「法然上人の日本的宗教」を主題とするならば、この際最も關心さるべきことは法然教が眞に日本人の宗教としての卓越性をもつことの論理的闡明がなければならぬ。そしてこのことの文證はこゝでは第二義的な意味をもつものでしかない。すなはち法然教が出づべくして出でた論理的必然性の究明(領受)とこの必然的に根據する現代的な指示(開顯)に於て一層の追究が望ましい。従つて、極言を許さるゝならば、本書は眞に來るべきものに向つての過度期的努力の域にとゞまる。

次に挙げらるべきは、前田聽瑞氏の「法然上人」(京都弘文堂教養文庫80、昭和十六年二月刊、定價五拾錢)がある。著者は關西淨土宗學界の耆宿にして思索する宗學者として著はるゝ人

である。本書の體裁は一部片々の小冊子ではあるが、その内容とするところは、著者が日頃鑽仰措く能はぬ還愚法然房の眞面目を描いて剩すところがない。簡潔の麗筆、周到の思索、寔に苦心の作と稱してよく、恐らくは何人が筆を執るにしても、還愚の聖を説いてこれに勝れるものは容易に望まれないであらう。但し、本書は普及版としての性質上、現代の知識人に對しては法然教の正義を紹介することを主題としてゐることは否まれない。こゝに本書の見逃すべからざる價值と意義があると、もに、來るべき宗義顯彰に向つては完全を期しがたい宿命を持つ。もとより、一部の隨處にその片鱗を示す對時代的な考慮や現實的な反省は、著者の胸中深く藏さるゝ信念のなみ／＼ならぬものあるを想はしむるものであるが、冀くは、この著者にしつゝ、眞向より宗學の指針をテーマとする勞作あらんことを漏仰せざるを得ない。今日の宗學界の切なる要請は、手堅さとか誤りのないとかいふことを顧慮する場合ではなくて、たとへ荒削りであつても又部分的な缺陷をもつにしても論理的必然性に根據する體系と指針の明示にあることは言を俟たないところであらう。

第三に取り上げらるべきものとして、山本幹夫氏の「法然佛教とわが國體思想」(法然上人鑽仰會、昭和十六年七月刊、定價貳圓貳拾錢)がある。著者の經歷は普通の宗學者とはかなりの距りがあり、こゝに本書の特殊な價值と意義があり、思索の學に深き造詣をもち佛教に關心すること一方ならぬ著者が、法然

佛教の源流を衝いて、その成立の當初に於てすでに支那精神と結合する抱擁性と普遍性をもつ法然教學は正しく日本文教の原型的意義を有するとともにわが國體思想の面目の貫通せる性格を具備することを高調するその立論と構想は、全くの新分野の開拓であると同時に默過し能はざる功績を内包するものと考へられる。本書の文中宗義の本質に觸れること尤だしば／＼であり又新しきに向つての示唆妙からぬものがあるのであるが、著者は宗門に籍をおく人ではない、併せて本書一部の主題とするところが前記の如き意味に考へられる以上、その稀に見る良書たるは言ふまでもないが、本書を以て直ちに宗義開顯の書とし、以て宗學の今日の惱を圖り宗門の明日の實踐を知らんとすることは聊か考慮の餘地が存するのではなからうか。著者の洗練された論理的明快さを緯として宗門の惱を經とするもの、出現こそ吾々の待望措く能はざるところのものである。

これらの外に、やゝその趣を異にするものではあるが本年度刊行の壓巻にて藤本了泰氏編になる「淨土宗大年表」(大東出版社、昭和十六年三月刊、定價貳拾五圓)がある。四六倍版一千頁に垂んとするこの大著は、宗祖降誕以降八百年間に亘る内外の全資料を巨細もらすことなく記載した斯界の定本として學者の座右の寶典とするに慚ぢない。又、平井正戒氏の「隆寛律師の淨土教附遺文集」(金澤文庫淨土宗典研究會、昭和十六年六月刊、定價五圓)は、篤學の士たる著者が多年の功成り相州金澤文庫の新資料により、從來とかく明晰を缺いてゐた隆寛律師の

教説の概要を明示せんとしたものであるが、これらの二書はその性質、或は資料としての域を脱せず、或は専門的考究にとゞまるものなるが故に今は慮外におかるべきものであらう。

上述の三書は、その詳細を論ずるならば、たいその一部のみについていふも恐らくは僅に一文を稿するに足るものであつて、かくの如きことは今の場合到底許さるべくもないところであらう。

然しながら、こゝで留意に値することは、その方面と形態の相違こそあれ、これらの三書はその述作の動機に於て殆んど共通なるものを持つといふことである。その共通なる動機といふのは言ふまでもなく、現在の宗學の悩みに直面して明日への光を求めてゐるといふことである。そして、これらの書に盛られた悩みの程度と、これが解決への段階はそのまゝ、今日の宗學界の苦慮を代表するものであり、宗學的研究の全般を如實に表示してゐるものと謂ふことが出来る。然も、上掲の書に於て、宗學の本質顯彰に缺くところがありこれが取り扱ひ方になほ満たされざるものがあるならば、それは、とりもなほさず、現在の宗學界の不備と弱點を傍證するものと謂はねばならぬ。吾々は、鶴首して宗門の興望に應ふる大導師の出現を欣ぶとも、に聲を大にして宗門待望の書出でよ望んで止まぬ。

(三)

宗門の興望とは、先に一言せし如く、宗門の依據すべき指導

原理の明示とこれが具體的實踐の開顯である。周知の如く實際問題として、その特殊相に於て現實に宗義を活かしてゐる事例は決して尠くはない。然しながらこの特殊相は普遍的原理に向つての關聯に昏い。言ひかへれば、現在、宗門の各層に於て宗義が活されてゐるかの如き現象の存するのは、かくあるべき理によつてかくあるといふ論理的根據に乏しい。偶々人を殺したからそれが不具戴天の仇敵であつたといふ如きことは單なる偶然にすぎないのであつて論理的普遍性を持たぬ。十字路に立つ旅人が當てどなく選んだ道が圖らずも目的地に通じてゐたといふが如きは眞に夢と簡ふところがない。吾々は、宗門の活きつゝある諸部門の悉くが、かくの如き性質をもつといふのではないけれども、現在の宗門に於ける指導原理の貧困は何人も目を掩ひがたいところであらう。

普遍的な原理は特殊の具體相の上に自らを具現するとともに、特殊の具體相は普遍的原理に根據することによつて自らの眞理性を意義づけられるのである。淨土宗義は、より抽象的普遍的なるものに對しては特殊としての立場によるものではあるけれども、淨土宗の諸現象に向つては自らを普遍としての位におくものである。ここに宗義に於ける二面性は慎重に牢記されなければならぬ。普遍に立つべくして普遍に立ち、特殊によるべくして特殊によるそれが所謂宗學に於ける論理性といはるべきものである。

たとへば、彌陀は普遍的原理たりると共に又特殊の佛陀と

して救済の具體相をもつ。衆生は佛性の本具に於て著しく普遍に接近するけれども迷妄の現實に於て甚だ特殊的存在である。

もし宗學が、それ本來のすがたを要請するならば即ち宗學が三世一貫の法としての宗義の眞理性を瞭かにせんとするならば、その教説に於ける普遍的なるものと特殊なるものとに對する誤つなき理解を持たねばならぬ。宗學の本務とするところは、宗門存在の根源たる普遍的原理の把握とこれが具體的特殊相への開顯、並に宗門に於ける具體的特殊相を論理的に意義づけること即ち普遍的原理への關聯を明かにすることではなければならぬ。

然るにもし、普遍的概念を過つて特殊の意味に於て考へ、特殊の表現を識らずして普遍的理におかんとすることときとあらば、それは論理を亂すものであり方法の當らざるものである。土臺なき蜃氣樓は所詮虚妄の存在でしかないやうに、論理的根據なき宗門はたとへその外觀の美を誇るにしても畢竟蟬のぬけ殻でしかない。

(四)

この日、宗門の課題は多い。しかしながら要をいふならば、それらすべての淵源するところは如上の論理の貧困である。上み國體と宗義との關係より下も臣道實踐と念佛生活との關係に至るまで、普遍を普遍として特殊を特殊とする論理的明晰の前には、問題はさほど困難ではないのではなからうか。あからさ

まにいへば、今日の宗學的諸問題は殆んどすべて未解決のままに残されてゐる。空無我の思想的秘鍵を内に擁しながら外滅私奉公の具體相を示すこと明快を期し得ないが如き論理的要素の缺除を以てしては、「枉れるを正す」立場に置かるべき佛敎が、逆に自らの「枉れるを正す」ことを要請さるゝのも亦た止むを得ないこと、謂はねばならぬであらう。

現實のすがたはかくの如くであるけれども、このことは決して、現在の宗學界の努力と苦悶が徒勞に歸するといふのではない。もしその方角にして誤まることなければ、闇黒は光の裏であり、嚴冬に春芽のきざすことを想はねばならぬ。惱むべくして惱むこそ本然の理であり眞實の道である。この立場より、吾々は、宗學界よ苦悶せよ、宗學よ眞實に惱みを自覺せよといひたい。たゞ冀つて止まぬところは、黎明の一日も早からんことゝ、その方向を誤らざることのみである。

説くところ暴言に走り、論ずるところ背筋を逸することいふまでもない。非禮非義はひとへに海容を願つて止まぬのではあるが、草するところ爲にするにあらず、衷心宗學の正鶴を祈るや切なるものあるを諒恕されたい。